



第37回 日産 童話と絵本のグランプリ

KOKUBANMARU

村上 あつこ

帰りの会が終わって、「さようなら」の声が教室中に響きわたると、途端にぼくはユーウツになる。なぜってそれは、後ろにランドセルをとりに行かなくちゃならないから。ぼくのロッカーの前の席にはアキオがいる。

いつまでもぐずぐずしちやいられないから、仕方なく席を立て後ろへ行つた。僕の前にアキオが立ちふさがり。キツネみたいな目がにやりと笑う。その時、突然、後ろの黒板にふわっと絵が現れた。あれ？ 茶色いソフトクリーム？ 違う……。まるで、アキオの頭の上のうんこが載ってるみたいに見えて、ぼくは、思わず、ぷつと噴き出してしまった。

「おい、なんだよ」アキオがひるんだ隙に、ぼくは、さつとランドセルをひつつかんで、ダッシュした。

次の日ぼくは、目覚まし時計が鳴る

よりも早くに飛び起きた。あの不思議な絵がまだあるか見たかったから。

でも、誰もいない教室に入つて、後ろの黒板を見て、驚いた。黒板いつぱいにチョークで絵が描いてある。いたずら書きみたいなのじゃなくて、ファントジー映画みたいな感じ。チョークでこんなすごい絵が描けるなんて、びっくりだ。それに、未来の街、空を飛んでいる電車、これってもしかして……。

「タクトくん、おはよう」

うわつ。黒板が、喋った。

「日直さんの時、私のことをいいに拭いてくれてありがとう」

突然、そんなことを言われてぼくは面くらった。

「こう見えて、デリケートなもので、乱暴に扱われると結構痛いんですよ」

「この絵って、ぼくの作文の……？」

「そうですよ。『未来のモノがたり』——みなさんの発表、とてもよかったです。自分の好きなモノが、未来の

社会でどんな風になっているか、を書くという作文でしたよね。あの時ひとつひとつ、私の心の中に絵が浮かびあがりました」

やっぱり、ぼくの作文の絵だったんだ。

「ほんとにすごい。すごくきれいで、かつこいい。ぼく、作文苦手だったけど、こんな絵になるなら、もつと書いてみたいぐらい」

でも、アキオには馬鹿にされたつね。四年生にもなつて、まだ電車が好きなんで、幼稚っぽい、って。

「……あつ、そうだ。昨日、ぼくのこと、助けてくれてありがとうごさいます」

「助けたってわけじゃないんですよ。ちよつとしたいたずら心で。まさか、あの絵が見えるとは思わなかった。この学校に来て、もう三十年になりますが、私の心に浮かんた絵が見えたのは、君が初めてですよ。だから、今朝、君が来た瞬間に作文の絵をばつ

と浮かべてみせたんです」

ふふつと黒板さんの笑い声がしたと思つたら、すつと絵が消えてしまった。

「ねえ、誰と話してるの？」

振り返ると、学級委員のカンナちゃんが立っていた。

「え、別に……。ひとりごと」

「ウソ」

カンナちゃんは、ずんずんぼくのほうに近づいてくると、ぼくの顔をじーつと見た。

「なんかアヤシイ。なんか楽しそう」

困つたな。絵はもう消えちゃったし、黒板が喋つたなんて言つても、きつと信じてもらえない……。ふと前の黒板を見ると、今日の日直の名前がカンナちゃんになっている。そうだ！

「ねえ、今日、黒板をいいに拭いてみて。心をこめて。それで、明日の朝、早くきて」

カンナちゃんは、大きな目を見開いて、しつかりとうなずいた。

翌朝、ぼくは、正門の桜の木の下でカンナちゃんと待ち合わせると、教室に一緒に入った。

「あ！」

描いてあったのは、カンナちゃんの書いた作文の絵だった。確か、花だらけの森の中に扉から何から全部自動でうごくお城があつて……。そう、すごく気が強そうにみえて、カンナちゃん意外と乙女だ。

「すごい、これ、あたしが書いたお話の絵？」

カンナちゃんが漫画の主人公みたいに目をきらきらさせて言つた。

「タクトくんが描いたの？」

「まさか。黒板さんだよ。黒板さんの心に浮かんた絵なんだよ」

「黒板さん？……」

「おや、お仲間が増えましたね」

黒板さんが笑つたので、カンナちゃんもはびっくり。

それから三人で話していると、突然また、すつと絵が消えた。

「なんか変な声(こゑ)がきこえたけど……」
振り返ると、カンナちゃんと仲良(なかよ)しのミサキちゃん(ミサキちゃん)がいた。今日(きょう)の日直(ひちやく)は——ミサキちゃんだ。

そんな風(ふう)にして、毎日(まいにち)、一人(ひとり)ずつ仲間(なかま)が増えていった。みんな、自分の書いた作文(か)の絵(え)を見て、驚(おどろ)いたり、喜(よろこ)んだりした。ぼくは、毎日(まいにち)学校(がっこう)へ行くのが楽(たの)しみになっていった。そのせいか、アキオがからかってきても、だんだん(だんだん)気(き)にならなくなっていた。

日直(ひちやく)はぼくから一回(ひとまわ)りして、最後の一人(ひとり)、アキオの番(ばん)になっていった。いつも遅刻(ちこく)ぎりぎりになるアキオが教室(きょうしつ)に入(はい)ってくると教室(きょうしつ)がしんと静(しず)まにかえた。

「な、なんだよ……」
全員(ぜんいん)にじつと見(み)つめられて、アキオがたじろいだ。これじゃ、いじめてるみたいで気持(きもち)が悪い。ぼくがわけを話(はな)したけど、アキオはぼくにくっつかかった。

その日(ひ)の朝(あさ)、教室(きょうしつ)に入(はい)ってきた先生(せんせい)は、ぼくたちを見(み)て、目(め)をぼちぼちさせた。ぼくたち全員(ぜんいん)、青(あお)い服(ふく)を着(き)てきたから、もちろん、揃(そろ)いの服(ふく)じゃないから、青色(あおいろ)は濃(こ)かったり、水色(みずいろ)つぽかったり色々(いろいろ)だったし、シャツだったりブラウスだったりでバラバラだったけど。

「なんで……」
きょとんとしている先生(せんせい)にカンナちゃんが言(い)った。
「たまたまです。たまたまかぶりまし

た」
午(ご)前(ぜん)の授業(じゆぎやう)の後(あと)、給食(きふく)を食(た)べ終わ(お)ると、ぼくたちは先生(せんせい)を職員室(しやくしんしつ)へ追(お)い立てた。
青(あお)い服(ふく)を着(き)たぼくたちは、前(まえ)の黒板(こくばん)のほうにずらりと並(なら)んだ。
それから、この間(あいだ)、理科(りか)の実験(じつけん)で配(くば)られた揃(そろ)いの四角(しかく)い鏡(かがみ)を取(と)り出(だ)して手(て)にした。

ぼくがカーテンをあけると、教室(きょうしつ)の中に光(ひかり)が差(さ)しこんだ。その光(ひかり)を後(うしろ)の

「そんなの嘘(うそ)に決(き)まつてる！ ばかばかしい」
「見たことのない人(ひと)に信(しん)じて言(い)ってても無理(むり)よ。ほっとこうよ」
「そうだ、そうだ」
みんなが言(い)った。

でも、アキオにも自分の作文(さくぶん)の絵(え)を見せてあげたいと思(おも)わない？」
ぼくが言(い)うと、みんなはうなずいた。

「アキオ、嘘(うそ)だと思(おも)っていいから、黒板(こくばん)をていねいに拭(ふ)いてみて」
だけど、翌日(よくじつ)、アキオの絵(え)だけが黒板(こくばん)に浮(う)かびあがらなかった。

「ほら、見(み)ろ、やつぱり嘘(うそ)じゃないか」
「違うわよ、心(こゝろ)をこめて拭(ふ)かなかったから。それか、日(ひ)ごろの行(い)いが悪いからよ」
カンナちゃんがずばつと言(い)った。

「なんだと！」
「おい、やめろよ」
みんながわーわー言(い)い出(だ)したところ
で、後(うしろ)から、黒板(こくばん)さんの声(こゑ)がした。

黒板(こくばん)に反(はん)射(しゃ)させる。みんなが小さく鏡(かがみ)を揺(ゆ)らすと波(なみ)の光(ひかり)みたいに見えるはずだ。
「ありがとう」
黒板(こくばん)さんの声(こゑ)がした。

鏡(かがみ)を裏返(うらがえ)し、反(はん)射(しゃ)させるのをやめると、黒板(こくばん)さんに青(あお)い線(せん)が浮(う)かびあがつた。少しづつそれは増(ふ)え、やがて、絵(え)になっていった。キラキラした未来(みらい)の海(うみ)を泳(およ)ぐように進(すす)む銀色(ぎんいろ)の船(ふね)。その船(ふね)の上(うへ)には、ぼくたちクラス全員(ぜんいん)が笑(わら)顔(がお)で風(かぜ)を受けて立(た)っている。
「すごいな」
アキオの細(ほそ)い目(め)が笑(わら)う。

ぼくたちはみんなで、船体(せんたい)に船(ふね)の名前(なまえ)を書(か)き足(た)した。
"KOKUBANMARU"
って。

「違います、違(ちが)います。いや、申し訳(わけ)ない」
アキオは、びつくりして、とびあがった。

ぼくたちは、後(うしろ)の黒板(こくばん)さんに近(ちか)いて、話(はなし)を聞(き)いた。
「アキオくんの作文(さくぶん)は海(うみ)の話(はなし)だったでしょう。それがなんだかよくイメー

ジできなかったんですよ。三十年間(さんじゅうねんかん)、この教室(きょうしつ)で色々(いろいろ)なことを学(まな)びました。先生の言葉(ことば)や教科書(きょうかしょ)からね。窓(まど)からは青(あお)い空(そら)も太陽(たいよう)も見(み)えます。だから、どんな絵(え)も想像(そうぞう)することができんです。でも、アキオくんの書(か)いていた海(うみ)のキラキラだけは、なんだかよくわからないのです」
思(おも)ってもみなかつた言葉(ことば)に、ぼくたちは目(め)を見合(みあ)わせた。確(たしか)かに海(うみ)の波(なみ)のキラキラしてるのって、見(み)ないとわからないかもしれない。でも、黒板(こくばん)を海(うみ)へもつていくわけにはいかないし……。

審査員コメント

クラスがひとつにまとまるのは、なかなかむずかしいものです。真(ま)っ直(ちよく)ぐには進(すす)みません。うまくいきそうなときに限(かぎ)って、難題(なんだい)が持ち上がるのです。その難題(なんだい)をクラスみんなの知恵(ちえ)と力で乗り越えていく過程(かてい)が、楽しくさわやかに描(えが)かれています。

吉橋 通夫

村上 あつこ

主婦 東京都江戸川区

受賞のことば

この度は、優秀賞(ゆうしゆうしょう)をありがとうございます。5回目(ごまいど)の応募(おうぼ)で初めてお電話(でんわ)をいただきました。とても嬉(うれ)しかったです。童話(どうわ)は、自分の生活(せいかつ)の中で感動(かんとく)したことや好きなことをもとにして考えるようにしています。海(うみ)や川(がわ)が太陽(たいよう)の光(ひかり)でキラキラ輝(かがや)いているのを見るのが好き(すき)です。これからも、コツコツと創作(さくしやう)を続けていきたいです。